

妊婦・授乳婦の服薬への意識に関する調査研究

高儀佳代子,^a 恩田光子,^{*,a} 岩城晶文,^b 西川直樹,^b 荒川行生^a

A Survey on the Attitudes of Pregnant and Lactating Women about the Use of Drugs

Kayoko TAKAGI,^a Mitsuko ONDA,^{*,a} Akifumi IWAKI,^bNaoki NISHIKAWA,^b and Yukio ARAKAWA^a^aOsaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1 Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan, and ^bTakatsuki General Hospital, 1-3-13 Kosobe, Takatsuki, Osaka 569-1192, Japan

(Received February 5, 2010; Accepted June 29, 2010; Published online June 29, 2010)

The purposes of this survey were to determine the attitudes and the extent of anxiety of pregnant and lactating women about drug use, and to research priority issues for pharmacists' intervention. Postpartum lactating women and mothers with children in a Growing Care Unit (GCU) in hospitals certified as Baby Friendly Hospital (BFH) were surveyed. The questions included the images the respondents had of drugs before pregnancy, the extent of anxiety about drug use, and ways to relieve it. The highest number of respondents (49.1%) did not want to use drugs often before pregnancy, but said "physician-prescribed drugs are fine". 24.5% had no negative images, and they "take drugs when necessary without worrying". An additional 14.2% did not like drugs, and "avoid them whenever possible", followed by 9.4% who did not want to use drugs, but were willing to take health food and other over-the-counter items. The respondents reported that the extent of anxiety about drug use was 79.3% during pregnancy, which was higher than 71.7% during lactation. It was not influenced by birth experience and age. "The images of drugs before pregnancy" and "the extent to which the anxiety was relieved during pregnancy" were extracted as factors related to the extent of anxiety, verifying that negative images of drugs and low degrees of relief from anxiety raise the anxiety of pregnant women. The above shows that pharmacists need to understand the anxiety of pregnant and lactating women about drug use, and the images they had of drugs before pregnancy, thereby they are expected to work actively to determine and relieve the anxiety.

Key words—pharmacist; pregnancy; lactation; anxiety; medication

緒 言

1960年代のサリドマイド薬害以降、妊娠・授乳中の薬剤の使用は、催奇形性等の危険性を高めると認識されている。¹⁾そのため、急性疾患に対する鎮痛剤や抗菌薬等の使用中止、また、てんかんや甲状腺疾患等の慢性疾患に対する治療薬服用中の避妊や授乳の回避といった医師からの指示を受け、不安や疑問を抱く女性、とりわけ妊婦・授乳婦は少なくないと推察される。その一方で、薬剤が胎児にとって最も危険な「絶対過敏期」を誤解し、その時期に薬を使用する妊婦も多いとの指摘もある。^{2,3)}以上の背景から、妊婦・授乳婦の服薬行動や薬に対する意識とそれらとの関連要因を把握することは、薬剤の使

用に伴う妊婦・授乳婦の不安解消や危険回避のために、医療提供者が的確な介入を行う上で重要であると考えられる。

妊婦・授乳婦が、服薬に対し過度な不安や疑問を抱いたり間違った知識を持ったりする要因として、提供される情報の内容とその妥当性、医療従事者による情報提供や相談応需の体制といった「情報に関する要因」、また、女性が妊娠以前から持っている薬に対するイメージ、出産に対する不安、妊娠・授乳中における薬の使用に対する不安といった「意識に関する要因」などが想定される。

五十里ら⁴⁾は、妊婦・授乳婦を対象とした医薬品への不安に関するアンケート調査と、医師・薬剤師を対象とした情報の入手状況に関するアンケート調査を実施し、前者から、不安を抱えている妊婦・授乳婦への適切な情報提供体制の整備がまだ不十分で

^a大阪薬科大学, ^b社会医療法人愛仁会高槻病院

*e-mail: onda@gly.oups.ac.jp

あること、また、後者から、医療従事者自身も信頼性が担保された必要十分な情報を求めていることを明らかにした。さらに中島ら¹⁾は、情報不足の解消と相談窓口の整備を目的に設置された国立成育センター「妊娠と薬情報センター」での成果として、医師・薬剤師の相談応需により相談者の誤解や認識が改善されたことを挙げ、特に薬剤師による相談応需の重要性を指摘している。

また、佐藤⁵⁾は、女性を支援するにあたり、妊産褥期の女性を対象に調査を実施し、出産を迎えた女性の抱く全般的な心理不安の程度や要因を考究している。その結果、不安になり易い特性を持つ女性だけが不安を抱いているわけではなく、産褥期より妊娠末期の方が不安になり易いことを明らかにした。また同時に、「出産経験の有無」、「夫の協力度」、「職業の有無」といった女性の背景や環境が不安の程度に影響するという知見を得ている。

以上の文献レビューにより、妊婦・授乳婦への薬に関する情報提供や相談応需のあり方、また、妊産褥期を迎えた女性の心理不安やその要因に着目した先行研究が複数存在することがわかった。しかし、妊娠・授乳中の“薬を服用すること”に対しての不安やその関連要因に特化して検討したものはなかった。そこで、本研究では、妊婦・授乳婦が服薬に対して抱く意識や不安を把握し、薬剤師が介入するための課題を考究することを目的とした。

方 法

1. 対象及び調査項目 総合周産期母子医療センターを有し、ユニセフ・WHO から BFH (Baby Friendly Hospital) の認定を受けている社会医療法人愛仁会高槻病院において、平成 21 年 2-3 月に産婦人科を退院した授乳婦 (121 名) と GCU (Growing Care Unit: 成長児治療室) 入院児の母親 (20 名) を対象に、アンケート調査を行った。調査票は無記名自記式とし、回答は選択形式と自由記述形式の両方を用いた。退院指導時に調査の目的を説明した上で調査票を配付し、病棟に設置した回収ボックスへの任意投函を依頼した。なお、本調査実施時には、産婦人科病棟において薬剤師による薬剤管理業務は行われていなかった。

主な調査項目は、回答者属性 (年齢、子供の数、妊娠中か授乳中か)、妊娠以前からの服薬経験、薬

に対するイメージ、妊娠・授乳中の服薬経験と服薬に対する不安の程度 (「①全く感じたことはない」～「④強く感じていた」の 4 段階)、妊娠・授乳中に服薬に対して不安が生じた時の解消方法、当該情報源によって不安が解消した度合い (「①全く解消されなかった」～「④完全に解消された」の 4 段階) とした。調査票は、五十里ら⁴⁾の調査を参考に作成した。また、児の先天異常の有無、回答者自身の疾患や社会的背景については、回答者のプライバシーやメンタル面の負担を配慮し、調査項目から除外した。

2. 分析方法 各調査項目に対する回答分布を確認し、妊娠中と授乳中で服薬に対する不安の程度に差があるか否かを検討するため、妊娠・授乳中の不安の程度を Wilcoxon の符号検定で比較した。次に、回答者属性、薬に対するイメージ、服薬経験 (妊娠以前、妊娠・授乳中)、不安解消度によって、不安の程度に差があるか否かを検討するため、 χ^2 検定にて群間比較を行った。また、不安の程度と分析には Windows 版 SPSS 17.0J を使用した。

3. 倫理的配慮 アンケート調査を行うにあたり、当院倫理委員会の承認を得て行った。また、アンケート調査を実施する際に、患者にアンケートの目的と取り扱いについて十分に説明をした後、同意を得られた患者にのみ実施した。

結 果

1. 回答者の属性 調査票は 141 名に配付し、106 名から回答を得た (回収率 75.2%)。回答者の年齢分布は、25 歳以下 13.3%、26-30 歳 24.8%、31-35 歳 39.0%、36 歳以上 22.9% であり、平均年齢は 31.4 歳 (標準偏差 5.1) であった。子供の数 (出産経験) は 1 人: 68.9%、2 人: 25.5%、3 人以上: 5.6% であった。106 名全員が授乳婦であり、そのうち 103 名 (97.1%) は、児に母乳を少しでも与えていると回答していた。

2. 妊娠以前からの服薬経験 「経験あり」は 17 名 (16.0%) で、服用薬は一般用医薬品も含め、主に酸化マグネシウム等の便秘薬 (7 名) やロキソプロフェンナトリウム等の解熱・鎮痛薬 (4 名) であった。また、てんかん、統合失調症、甲状腺機能亢進症など基礎疾患による服薬経験者は各 1 名であった。

3. 薬に対するイメージ 回答分布は、「あまり服用したくないが、医師の処方薬なら大丈夫」52名(49.1%)が最も多く、以下「特に悪いイメージもなく、必要な時には安心して服用できる」26名(24.5%)、「嫌い、できるだけ服用したくない」15名(14.2%)と続いた (Table 1).

4. 妊娠・授乳中の服薬経験, 服薬に対する不安 「服薬経験あり」と回答した人は妊娠中: 74名(69.8%), 授乳中: 55名(51.9%)であり、妊娠中の方が多かった. 妊娠・授乳中のいずれかに服薬経験があった82名の服用薬の入手先は、「産科医による処方薬」が最も多く69名(84.1%), 主に便秘薬(32名), 鎮痛剤(22名), 抗生剤(16名), 鉄剤(16名)であった. その他、「産科医以外による処

方薬」14名(17.1%)は抗てんかん薬や抗甲状腺薬といった妊娠以前からの継続処方であり、「一般用医薬品」6名(7.3%)では風邪薬(3名), 便秘薬(2名), 解熱・鎮痛薬(2名)等であった.

5. 妊娠・授乳中の服薬に対する不安の程度とその内容 服薬に対する不安の程度は、「少し感じていた」、「強く感じていた」と回答した人が妊娠中・授乳中ともに大半を占めた. Wilcoxonの符号検定の結果から、授乳中に比して、妊娠中の方が服薬に対する不安の程度は大きかった (Fig. 1). また、具体的な不安内容についての自由記載は、『産科以外の医師や薬剤師の知識』、『医療従事者間の情報の差』を指摘する記載が複数得られた.

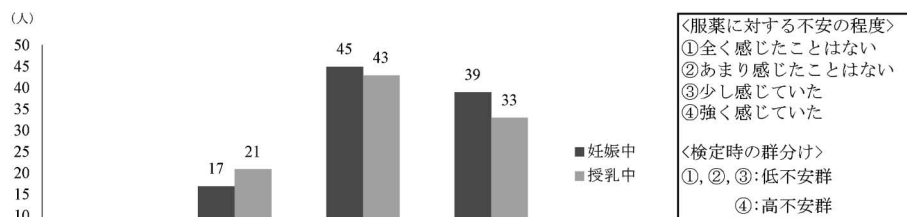
6. 服薬に対する不安の解消方法とその解消度 妊娠・授乳中に抱いた服薬への不安を解消する手段(情報源)は、「医師に相談」66名(62.3%)が最も多く、ついで「インターネットで検索」24名(22.6%)と続いていた. 服薬に対する不安の解消度は Table 2 で示すように、「完全に解消された」と回答した人が30名(28.3%)であった.

また、解消方法毎の解消度をみると、「医師に相談」や「薬剤師に相談」の選択者で得られた解消度が高く、逆に、「家族、友人に相談」や「自己判断」の選択者では高い解消度が得られない傾向がみられた (Table 3).

Table 1. Images of Drugs before Pregnancy

薬のイメージ	%	検定時の群分け
嫌い、できるだけ服用したくない	14.2	ネガティブ
あまり服用したくないが、健康食品等の市販品なら気軽に服用できる	9.4	条件付ポジティブ
あまり服用したくないが、医師による処方薬なら安心して服用できる	49.1	
特に悪いイメージもなく、必要なときには安心して服用できる	24.5	ポジティブ
薬があれば(服用していれば)安心する	0.9	
その他	1.9	欠損値扱い

n=106



Comparison of the extent of anxiety during pregnancy and lactation
Wilcoxonの符号検定 (n=100)

不安の程度	n
授乳中<妊娠中	16
授乳中>妊娠中	6
授乳中=妊娠中	78

(p=0.023)

Fig. 1. Extent of Anxiety during Pregnancy and Lactation

Table 2. The Extent to Which the Anxiety Was Relieved

解消度	%	検定時の群分け
①全く解消されなかった	1.9	低解消群
②あまり解消されなかった	5.7	
③少し解消された	39.6	高解消群
④完全に解消された	28.3	
無回答	24.5	欠損値扱い
<i>n</i> =106		

Table 3. The Extent and Ways of Which the Anxiety Was Relieved (Multiple Answers)

方法	<i>n</i>	解消度合い：%			
		全く解消されなかった	あまり解消されなかった	少し解消された	完全に解消された
医師に相談	64	0	3.3	51.6	45.3
薬剤師に相談	16	0	0	56.3	43.8
その他医療関係者に相談	8	0	0	75.0	25.0
家族、友人に相談	23	4.3	8.7	73.9	13.0
医学書・雑誌など	2	0	50.0	50.0	0
インターネット検索	23	0	8.7	65.2	26.1
自己判断	4	25.0	50.0	25.0	0
その他	3	66.7	0	33.3	0

7. 妊娠・授乳中の服薬に対する不安と関連する要因の検討 妊娠・授乳中の服薬に対する不安の程度について、回答者属性（年齢、子供の数）、服薬経験（妊娠以前、妊娠中、授乳中）、薬に対するイメージ、不安の解消度との関連を検討するために、各々 Fig. 1, Table 1, 2 に示した群間で χ^2 検定を行った。その結果、回答者属性、服薬経験とは有意差が認められず、薬に対するイメージ（妊娠中： $p=0.016$ 、授乳中： $p<0.001$ ）、不安の解消度（妊娠中： $p=0.026$ ）の2項目において有意差がみられた（Tables 4 and 5）。さらに、不安の程度と関連が得られた2項目（「薬に対するイメージ」及び「不安の解消度」）について、回答者属性、服薬経験との関連を調べた結果、薬に対するイメージにおいて、群間の平均年齢（「条件付きポジティブ」イメージ群と「ポジティブ」イメージ群との間）で有意差がみられた（ $p=0.048$ ）。各群の平均年齢は、「ネガティブ」イメージ：30.9歳、「条件付きポジティブ」イメージ：32.3歳、「ポジティブ」イメー

Table 4. The Relationship between “the Images of Drugs before Pregnancy” and “the Extent of Anxiety”

不安の程度（群）		イメージ（群）：%		
		ネガティブ	条件付きポジティブ	ポジティブ
妊娠時	低不安	30.8	62.3	77.8
	高不安	69.2	37.7	22.2
$(p=0.016)$				
授乳時	低不安	23.1	67.2	88.9
	高不安	76.9	32.8	11.1
$(p<0.001)$				

Table 5. The Relationship between “the Extent to Which the Anxiety Was Relieved” and “the Extent of Anxiety during Pregnancy”

不安の程度（群）	不安の解消の度合い（群）：%	
	低解消群	高解消群
低不安群	48.0	73.3
高不安群	52.0	26.7
$(p=0.026)$		

ジ：29.5歳であった。

考 察

本調査では、回答者の平均年齢は31.4歳、初産が7割近くであった。平成20年人口動態調査（厚生労働省）によると、国内の出産時の母親の平均年齢は30.9歳であるため、本調査の回答者は国内平均より少し年齢層が高かった。しかし、回収率が高く、出産のため入院されていた授乳婦の多くから回答が得られたため、ある程度平均的な意見が反映されたと考えている。

妊娠以前から服薬経験があった回答者は少なく、薬に対するイメージは、「条件付きポジティブ」イメージが半数以上を占めていた。しかし、その条件は「医師の処方薬なら安心」、「健康食品や市販薬なら安心」という意見が混在していた。特に、後者が全体の1割弱を示したことから、妊婦・授乳婦への服薬指導時には処方薬だけでなく、健康食品や市販薬についての説明の必要性が感じられた。

妊娠・授乳中の服薬に対する不安は、どちらも3割以上が強く感じていた。その程度は、妊娠中の方が強い傾向がみられた。また、不安の解消度は半数近くの回答者が低く、多くの人が不安を残したままであった。それに加え、不安の解消方法と解消度

合いを見た場合、「医師に相談」は解消方法として多く選択されており、解消度も高かった。一方、「薬剤師に相談」は選択が少ないが、解消度が高く示されていた。さらに、「家族・友人に相談」や「インターネットでの検索」は頻繁に活用されているが、解消度が低かった。妊娠・授乳中の女性にとって、出産のための入院時が服薬相談を受ける重要な機会の1つであると推察でき、今後、産婦人科病棟での薬剤管理指導業務を行うことの必要性が示唆された。

妊娠中の服薬に対する不安の関連要因として、薬に対するイメージと不安解消度が抽出され、出産経験や年齢といった属性、妊娠以前や妊娠中の服薬経験は抽出されなかった。薬に対するイメージとの関係からは、“ネガティブ”イメージを持つ回答者は妊娠・授乳中の服薬に対する不安の程度が高く、また、不安解消度との関係からは、解消度が高いと妊娠中の服薬に対する不安の程度が低いことが示唆された。妊娠以前、妊娠中・授乳中の服薬の有無にかかわらず、薬に対してネガティブなイメージを持つことが妊娠・授乳中の不安を高め、そのことが服薬の判断やアドヒアランスに影響すると考えられる。そのため、服薬指導の際には、妊婦・授乳婦が持っている薬のイメージとその背景要因を考慮した指導を行うことも、妊婦・授乳婦の服薬不安を解消する1つの要素として重要であろうと考える。

一方、授乳中の服薬に対する不安の程度に関連要因として、不安解消度は抽出されなかった。その背景として、回答者が全員授乳婦であったため、ほとんどの回答者が調査実施時点ではまだ不安が十分解消されていなかったのではないかと推察している。

妊婦・授乳婦の「薬のイメージ」や「服薬に関する不安の程度」をより厳密に評価するためには、個々の薬剤についてのリスク情報と関連する不安要因を研究対象から極力排除することが望ましい。本研究における具体的手段としては、産科医から処方された便秘薬、鎮痛薬、抗生剤、鉄剤の服用経験者について個別に「薬のイメージ」や「服薬に関する不

安の程度」を比較することなどが考えられる。しかし、①薬剤を限定すると分析対象者が少なくなる、②分析対象者のほとんどが多剤服用のため、薬剤の種類によるイメージや不安を正確に特定できない、③調査票のデザイン上、各薬剤の服用時期（妊娠中 or 授乳中）が特定できないといった理由から精査が困難であった。また、本調査では、回答者が授乳婦であるため、妊娠中の不安に関しては、回答時と妊娠中とは異なっている可能性が考えられる。より正確な回答を得るためには、母親教室等で妊婦に対し調査依頼する必要がある。以上述べた本研究の限界を踏まえ、今後の継続調査では、研究デザインを推敲する予定である。

今後の課題として、記述形式の回答から得られた内容を精査し、服薬に対する不安の程度やその関連要因に関する選択形式の回答と記述形式の回答との関連についてさらに詳細な分析を進める予定である。

結 論

今回の調査により、妊娠・授乳中の服薬に対する不安解消への薬剤師の介入課題の1つとして、妊婦・授乳婦の服薬に対するイメージとその背景要因の把握が重要であることが確認できた。

REFERENCES

- 1) Nakajima K., Ishii M., Kushida K., Mura-shima A., Yamaguchi K., Watanabe N., Arata N., Ito N., Watanabe O., Irie S., Kitagawa M., *J. Jpn. Soc. Hosp. Pharm.*, **45**, 377-380 (2009).
- 2) Saka M., Arahori K., *Gifu Journal of Maternal Health*, **29**, 59-61 (2002).
- 3) Hayashi M., *Medicine and Drug Journal*, **42**, 1444-1449 (2006).
- 4) Ikari A., *Aichi Prefectural Journal of Hospital Pharmacy*, **36**(2), 1-65 (2008).
- 5) Sato K., *J. Jpn. Acad. Midwif.*, **20**, 74-84 (2006).